

## 現代の聖地にみる「癒し」と「蘇り」

——熊野セラピーを事例に——

天田 顕 徳

昨今、神社が「パワースポット」として目されるという状況がある。本報告では現在、そうしたパワースポット神社の一つとして人気を博し、「聖地」とも呼ばれている熊野神社や熊野古道を含む熊野地域の現在の姿を事例として取り上げ、熊野が持つ「パワー」として語られる「癒し」や「蘇り」という言説を分析した。

かつて、熊野は孝謙天皇により「日本第一大霊験所」と呼ばれ、多くの人々の信仰を集め、その霊験として、「小栗判官」の説話に象徴される、「癒し」や「蘇り」がとに有名であったことはよく知られている。現在、そうした熊野の観光パンフレットを確認すると、この「癒し」や「蘇り」というかつての霊験が、パワースポットの「パワー」としてPRされていることが確認出来るが、観光の現場で語られている「癒し」や「蘇り」とかつての霊験は果たして同じものであると言えるのだろうか。本報告では実際に「癒し」や「蘇り」が体験できるとする「熊野セラピー」という観光プログラムを事例に、現在語られる「癒し」や「蘇り」の内容を確認した。

右記プログラムは熊野古道のウォーキングに、五感エクササイズと呼ばれる特別な実践を加えたもので、緑を楽しむ(視覚)、森の香りを嗅ぐ(嗅覚)、風の音を聴く(聴覚)、杉の木に抱きつく(触覚)、地産のスローフードを味わう(味覚)等

の五感を刺激するプログラムとなっている。この実践を通し、参加者は「癒され」、「蘇る」とされるが、報告ではセラピーにより強調される「癒し」や「蘇り」は、自然と触れる事による「気分の向上」や、身体的に「リフレッシュ」したというニュアンスが強いことを指摘した。

続いて報告では、こうしたセラピープログラムの淵源に光を当て、かつての霊験が観光の舞台で語られるようになった背景を探り、加えて再度、現在語られる「癒し」と「蘇り」の特徴を追った。熊野セラピーは現在和歌山県が推進している「熊野健康村構想」事業の一事業形態であり、報告ではまず、この「熊野健康村構想」に注目をした。「熊野健康村構想」は「熊野本宮を中心とする熊野地域」がモデル地区とされ、この地域の地域資源である霊場熊野にまつわる霊験譚を活用し、雇用を促進すると共に、地域の活性化を目指すことが要点となっている。更にこの構想ではモデル地区である熊野を「蘇りの聖地」とすることがうたわれており、県により積極的に熊野の「聖地化」が目指されていた事が伺える。

更に和歌山県は「癒し」、「蘇り」の有効なサービス化を目指し、国土交通省の主催する「日本施策創発調査」に応募し、予算を得た上で、かつての霊験をサービス化するための調査を実施している。「熊野古道の心身への健康効果に関する科学的検証調査」、「熊野がもたらす心理的效果に関する研究調査」がそれに当たるが、これらの調査は、かつては信仰にその根拠を置いていた「癒し」と「蘇り」の根拠を科学的に語り直す試みであったといえる。こうした動きの背景には自治体が直接宗教を

宣伝することの困難さや人材登用の際に宗教を持ち出すことの難しさが透けてみえるが、ともあれ、このような背景で現在の熊野では「癒し」と「蘇り」が地域振興の意図のもと「サービス」として科学的根拠を持って提示されるに至っている。

最後に本報告では、霊験の語り直しの渦中にある熊野の社寺の位置付けを確認した。結論から言えば、寺社等はいった新しい語りに、歴史的な裏付けを与えている他、「単なる観光ではない」という観光から「はみ出す特別な部分」の魅力を場所を与えるという仕方、自治体と相補的に熊野の「特別さ」を支えていると結論づけられるのである。

## 観光地としての聖地

——ブラジル世界救世教の聖地ガラピランガ——

松岡 秀明

日本の新宗教教団のいくつか——たとえば、PL、世界救世教、崇教真光——は、巨大な聖地を有していることで有名である。これら聖地が強調するのは、「美しさ」であり、自然景観の中に伝統的なあるいは斬新な(時に奇抜な)建造物を配し、独特な空間をつくりだしている。

ブラジル世界救世教(以下、救世教)は一九五五年以来ブラジルで積極的に布教を行なっている。信者数は二〇〇〇年の国勢調査によれば十万九千三百十、日本の世界救世教いづのめ教団のホームページでは四十一万となっている。一九九五年、救

世教はサンパウロ市郊外のガラピランガ湖に面した三十二万平方メートルの広大な敷地によく整備された聖地を竣工した。それ以来、信者・非信者を問わず多くのブラジル人が聖地を訪れている。

救世教でこの聖地は、「ガラピランガ」、「聖地」(solo sagrado)、そして「地上天国」(paraíso terrestre)と呼ばれる。救世教は地上を天国にしようと主張するが、ガラピランガはそのモデルとして建造されたからである。広大な敷地に、七十一メートルの高さの塔を配したストーンヘンジ様の円環状の神殿、池、広場等々を配するガラピランガは、あたかも天国を主題とするテーマパークのようである。

観光地は、日常世界にまして美を鑑賞することが可能なように社会によって割り当てられた場所——フーコーの言葉を借りるなら「指定用地」(emplacement)——である。聖地は、宗教的な権威や正統性が顕示される指定用地、また、場合によっては宗教的実践を行なう指定用地でもある。そして、聖地が美を鑑賞するための指定用地となっている場合も少なくないが、ガラピランガも例外ではない。

救世教は美を重視しており、熱海、箱根、京都の日本の聖地と同様、ガラピランガも美を意識して造られている。「なんて美しいんでしょう。言葉では説明できません」。聖地へ参拝した三十歳代の女性の救世教信者は、私にこう語った。ガラピランガを訪れている信者にその印象を問えば、多くの人はこんなふうに答える。

ガラピランガは、信者だけの空間ではない。この聖地は入場